



中国の社会主義 文化大革命

(第三集)

北 京 外 文 出 版 社

中国の社会主義文化大革命

(第三集)

外文出版社

北京

目次

- すべての妖怪変化を一掃しよう……………『人民日報』社説（一九六六年六月一日）…5
- 人びとの魂にふれる大革命……………『人民日報』社説（一九六六年六月二日）…11
- 毛沢東思想は、われわれの革命事業の望遠鏡であり、顕微鏡である……………『解放軍報』社説（一九六六年六月七日）…17
- われわれは旧世界の批判者である……………『人民日報』社説（一九六六年六月八日）…25

すべての妖怪変化を一掃しよう

『人民日報』社説

(一九六六年六月一日)

プロレタリア文化大革命の高まりが、いま、世界人口の四分の一をしめる社会主義中国でまき起っている。わずか数カ月のあいだに、党中央と毛主席の戦闘的な呼びかけにこたえて、なん億もの労働者・農民・兵士大衆、広はんな革命的幹部と革命的知識人が、毛沢東思想を武器として、思想・文化の陣地にとぐるをまくおびただしい妖怪変化をなぎ倒してきた。その勢いはあらしのようにはやくてはげしい。かれらは、長年のあいだ搾取階級からおしつけられてきた精神的な首かせを打ちくだいて、ブルジョアシーの「専門家」「学者」「権威者」「開祖」なるものを徹底的に打ちのめし、その威風をすっかりたたき落としてしまった。

毛主席がわれわれに教えているように、わが国では、所有制の社会主義的改造が基本的になしとげられたあとでも、階級闘争は終わってはいない。「プロレタリアートとブルジョアシーとの階級闘争、各派の政治勢力の間の階級闘争、またプロレタリアートとブルジョアシーとのイデオロギーの面での階級闘争は、やはり長期にわたる、曲がりくねったたたかいであり、ときにはひじょうにはげしくなることさえある。プロレタリアートは自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとし、ブルジョアシーも自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとする。

する。この面では、どちらが勝ち、どちらが負けるかの問題は、社会主義と資本主義とのあいだでまだほんとうに解決されてはいない」。わが国が解放されてから十六年このかた、イデオロギーの領域におけるプロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争は、一貫してひじょうにはげしいものであった。いまの社会主義文化大革命は、この闘争の継続、発展にほかならない。この闘争は避けられないものである。プロレタリアートのイデオロギーとすべての搾取階級のイデオロギーは根本的に対立しており、平和的に共存できないものである。プロレタリア革命は、すべての搾取階級を消滅し、すべての搾取制度を消滅する革命であり、また、労働者と農民、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の差異をしないでいくもつとも徹底した革命である。したがって、それは搾取階級のもつとも頑強な反抗をうけないわけにはいかない。

革命の根本問題は権力の問題である。上部構造の各領域——イデオロギー、宗教、芸術、法律、国家権力のうち、もつとも中心的なものは権力である。権力があれば、すべてがある。権力がなければ、すべてが失われる。したがって、プロレタリアートは権力を奪いとつたあと、どんなにこみいった複雑な問題をかかえても、永遠に権力を忘れてはならず、方向を忘れてはならず、中心を失ってはならない。権力を忘れることは、政治を忘れ、マルクス主義の根本的観点を忘れて、経済主義、無政府主義、空想主義に変わってしまうことであり、それはつまり、頭のぼやけた人間になることである。イデオロギーの領域におけるプロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争は、とどのつまり、指導権を争奪する闘争である。搾取階級の武装が解除され、指導権が人民に奪回されても、かれらの頭のなかには反動思想がまだ残っている。われわれが、かれらの支配をくつがえし、かれらの財産を没収しても、それはかれらの頭のなかの反動思想を没収したことにはならない。搾取階級はいく千年もの

あいだ勤労人民を支配し、勤労人民のつくり出した文化を独占し、それを逆に利用して、勤労人民を欺まんし、愚ろうし、麻ひさせ、みずからの反動権力をうち固めてきた。かれらの思想はいく千年ものあいだ支配的な思想であったから、社会に広はん影響をおよぼさないわけにはいかなかった。かれらは、その反動支配がくつがえされたあとも、決してあきらめず、つねに以前のこうした影響を利用して、政治上、経済上の資本主義復活のために世論をつくり出そうとするものである。解放後十六年らしいの思想・文化戦線における絶えまない闘争は、今回の大小さまざまな「三家村」の反党・反社会主義の黒い糸の摘発にいたるまで、すべてが復活と反復活の闘争であった。

ブルジョア革命の時期に、権力を奪いとるため、ブルジョアジーもやはりまずイデオロギーの面から準備をととのえ、ブルジョアジーの文化革命をおこなった。ブルジョア革命は、ある搾取階級が他の搾取階級にとつてかわる革命であるが、それでも、いくども反覆し、いくども革命、復活・反復活の闘争をくりかえさなければならなかった。ブルジョア革命が思想の面から準備をはじめて権力を奪いとるまで、ヨーロッパの多くの国では、数百年もの長い年月がかかった。プロレタリア革命はすべての搾取制度を徹底的に終結させる革命であるから、搾取階級がプロレタリアートによつてすべての特権を剝奪されるのをおとなしく許し、みずからの支配の復活を考えないなどと幻想することはなさらできない。かれらはまだ生きのこつており、その野望も死にたえてはいないから、レーニンものべているように、かならず十倍もの狂暴さで、かれらの失つた楽園をとりもどそうとするであろう。ソ連でフルシチョフ修正主義グループが党を乗っとり、軍隊を乗つとり、政府を乗つとつた事実——これは全世界のプロレタリアートにとつてひじょうに重大な教訓である。いま、中国のブルジョアジーの代表

者、「学者、権威者」がねらっているのも、資本主義復活の夢にほかならない。かれらの政治的支配はくつがえされたが、かれらはまだ必死になつて學術の「権威」なるものをまもり、復活の世論をつくり出し、われわれと大衆を奪いあい、若い世代、将来の世代を奪いあおうとしている。

ブルジョアジーのおこなつた反封建的な文化革命は権力を奪いとると、すぐにこれに終止符を打った。だが、プロレタリアートの文化革命は、すべての搾取階級のイデオロギーに反対する文化革命である。この文化革命の性格は、ブルジョアジーの文化革命とはまったくちがつている。この文化革命は、プロレタリアートが権力を奪いとつたのち、政治的、経済的、文化的前提条件を手にいれてはじめて、もつともひろびろとした道をきりひらくことができるのである。

プロレタリア文化革命は、すべての搾取階級がいく千年にもわたつてつくりだしてきた、人民を毒する旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を徹底的にぶちこわし、広はん人民大衆のあいだに、まったくあらたなプロレタリアートの新思想、新文化、新風俗、新習慣をつくり出し、形づくつていこうとするものである。これは人類史上にかつてみない風俗習慣刷新の偉大な事業である。封建階級とブルジョアジーのすべての遺産、風俗、習慣はプロレタリアートの世界観で徹底的に批判されなければならない。人民の生活から古い社会の悪習をすっかり取りのぞくには、時間が必要である。だが、解放いらいの経験がものがたるように、もし大衆を十分に立ちあがらせ、大衆路線をあゆみ、風俗習慣の刷新をほんとうに幅のひろい大衆運動にしていくなら、効果は急速にあらわれるであらう。

ブルジョアジーの文化革命は、少数の新しい搾取階級に奉仕するものであるから、少数の人しか参加すること

ができなかつた。だが、プロレタリアートの文化革命は、広はん勤労人民に奉仕するものであり、もつとも多数の勤労人民の利益に合致する。したがつて、この革命は広はん勤労人民をひきつけ、結果して、それに参加させることができる。ブルジョアジーの啓蒙家たちは、つねに大衆を見くだし、大衆をおろかなものとみなし、自分を人民の当然の支配者と考えるものである。だが、プロレタリア思想をもつ革命家は、正反対であつて、ひたすら人民に奉仕する。かれらの目的は、人民大衆の自覚をうながし、もつとも広はん人民大衆の利益のために奮闘することにある。

ブルジョアジーは、いやしい利己心をもっているから、人民大衆にたいするにくしみをおさえることができない。マルクスはこう語っている。「政治経済学の取り扱う素材の固有な性質は、自由な科学的研究に抗して、人間の胸中のもつとも激しい、もつとも狭小な、もつとも悪意にみちた感情を、私利私害の復讐の女神を、戦場によび出す」と。打ち倒されたブルジョアジーもやはりそのとおりである。

いま、わが国のプロレタリア文化大革命の規模と勢いは、人類史上にかつてみないものである。その威力のすごさ、その勢いはげしきといい、その運動にはとばしり出た勤労人民のはかり知れない知恵といい、すべてはブルジョアジーのだんな連の想像をはるかにこえるものである。事実が雄弁に物語っているように、毛沢東思想はいったん大衆をつかむと、無限の威力をもつ精神的な原子爆弾となる。この文化大革命は、いま中国人民の社会主義事業を大いに前進させており、世界の現在と将来にたいしてもはかり知れぬ深い影響をおよぼすにちがいない。

わが国の怒とうのような文化大革命は、帝国主義、現代修正主義、各国反動派をあわてふためかせ、混乱させ

ている。かれらは、いましがた途方もない妄想にふけて、われわれの文化大革命は中国のつぎの世代の「平和的転化」に望みがあることを物語るものなどといったかと思うと、こんどは悲観、失望して、すべての消息は共産党の支配がやはりひじょうに強固なことを物語っているなどといい、また、すっかり途方にくれて、中国でおこる事柄をそのつど正確に判断できるようなほんとうの「中国通」は永遠に存在しないなどといったている。親愛な先生方、きみたちの妄想はつねに歴史の発展に逆行している。人類史上にかつてみないこのプロレタリア文化大革命の展開と勝利は、いま中国の土地に残存する資本主義勢力の吊鐘を打ちならすとともに、帝国主義、現代修正主義、すべての反動派の吊鐘を打ちならしているのである。きみたちの寿命はもうながくはないだろう。

われわれは偉大な毛沢東思想のかがやかしい光に照らされて、プロレタリア文化大革命を最後までおしすすめようではないか。この文化革命の勝利は、かならずわが国のプロレタリアート独裁をさらにうちかためて、われわれが各戦線で社会主義革命を最後までおしすすめるのを保証し、われわれが社会主義から勝利のうちに偉大な共産主義に移行するのを保証するであろう！

人びとの魂にふれる大革命

『人民日報』社説

(一九六六年六月二日)

いまわが国は、プロレタリアートが権力を獲得していろいろの偉大な変革の新時代におかれており、社会主義革命が日とともに深まりつつある新しい情勢のもとにおかれ、人びとの魂にふれる社会主義文化大革命の激流のなかにおかれている。

社会主義革命が一步一步深まり、社会主義教育運動が一步一步深まるにつれて、必然的にプロレタリア文化革命の問題がきわだってくる。ほんとうに社会主義革命に賛成しているのか、偽って社会主義革命に賛成しているのか、それとも社会主義革命に反対しているのか、これはプロレタリア文化革命にどのような態度をとるかに必然的に現われてくる。これは人びとの魂にふれる問題、つまり、人びとの世界観にふれる問題であり、人びとの頭のなかにあるものがプロレタリア世界観なのかブルジョア世界観なのかということにふれる問題である。これは二つの敵対する世界観の闘争である。

二つの敵対する世界観の闘争、すなわちプロレタリアートとブルジョア之間的の敵対する世界観の闘争は、ちょうど二つの軍隊が対戦するのと同じように、かならず一方が勝ち一方が負けるものである。そちらがこ

こちらを食いつくすのでなければ、こちらがそちらを食いつくす、東風が西風を圧倒するのでなければ、西風が東風を圧倒するのである。中間の道はありえない。

党と毛主席は、プロレタリア世界観で武装し、客観世界を改造すると同時に主観世界を改造するようわれわれに教えているが、ブルジョアジーの代表者やブルジョアの「学者、権威者」は、むりやりわれわれをブルジョア世界観の泥沼にひきこみ、われわれの社会主義の土台を掘りくずそうとする。大敵を前にして、われわれは毛沢東思想の偉大な旗のもとに団結し、それらの反党・反社会主義のブルジョアジーの代表者やブルジョアの「学者、権威者」にたいして、断固とした容赦のない闘争をあくまでくりひろげなければならない。かれらとあくまで闘争し、ブルジョアの妖気を徹底的に圧倒してのみ、人びとは、ブルジョア的な思想意識、伝統、習慣の力の影響から解放され、社会主義というこの大きな関所を立派に越え、社会主義革命の大道を堂々と前進できるのである。

社会主義社会には矛盾が存在しないというのは、誤りであり、マルクス・レーニン主義にそむいており、弁証法に合わない。いったい矛盾が存在しないということがありうるだろうか。千年後、万年後、一億年後にも、矛盾はやはり存在する。地球が壊滅し、太陽が消滅しても、宇宙にはやはり矛盾が存在する。いかなる事物もみな、矛盾のなか、闘争のなか、変化のなかにおかれている——これこそマルクス・レーニン主義の見方である。マルクス主義の本質は、批判的、革命的だということである。その基本点は、批判をし、闘争を進め、革命をおこなうことにある。これでこそ、われわれの社会主義事業をたえずおし進めることができるのである。毛主席は、つねづね、「木静かならんと欲すれども風やまず」という言葉を引用して、階級闘争は客観的存在であり、

人の意志によって左右されるものではないとわれわれに教えている。ブルジョアジーは、日々、われわれに影響をあたえ、われわれを腐食しようとしている。現在のこの闘争は、まったくブルジョアジーの代表者が挑発したものであり、しかもかれらは、長年にわたって準備をととのえ、そうしてきたのである。われわれが避けようとしても、避けられるものではない。闘争こそ生活である。こちらが闘いをしかけなければ、むこうが闘いをしかけてくる。こちらがたたかなければ、むこうがたたいてくる。こちらがむこうを消滅しなければ、むこうがこちらを消滅する。これは食うか食われるかの階級の格闘であり、こうした格闘のなかで警戒心を失うことは危険である。

毛主席はのべている。「われわれは、全体的な歴史の発展のなかでは、物質的なものが精神的なものを決定し、社会的存在が社会的意識を決定することをみとめるが、同時にまた、精神的なものの反作用、社会的意識の社会的存在にたいする反作用、上部構造の経済的土台にたいする反作用をみとめるし、またみとめなければならぬ」

ブルジョア・イデオロギーは、わが国ではまだひじょうに大きな力を持ち、ひじょうに大きな影響力をもっている。イデオロギーの分野でプロレタリアートとブルジョアジーのどちらがどちらに勝つかという問題は、まだ決着がついていない。

われわれは、イデオロギーをつかみ、上部構造をつかみ、理論、学術、文学・芸術などにとりこんで、プロレタリアートの思想的陣地をうち固め、プロレタリアート独裁をうち固め、社会主義の経済的土台をうち固めなければならない。

うち倒されたブルジョアジーの代表者もやはり、イデオロギーをつかみ、上部構造をつかみ、理論、学術、文学・芸術などにとりくみ、文化戦線で帝王将相、才子佳人、外国人、死人に舞台を支配させ、反党・反社会主義の宣伝をおこない、資本主義復活の世論をととのえている。

文章による論戦だから大局には関係ない、などと考へてはならない。ハンガリー事件では、ペトフィ・クラブの一群の修正主義文化人が先づう役をつとめたのである。山雨来たらんと欲して風楼に満つ。これは、かれらの反革命的復活のたくらみの前奏曲なのである。

したがって、現在われわれが思想・文化戦線でおしすすめているこの鋭い階級闘争は、思想面から資本主義復活の陰謀を粉碎する闘争、思想面から修正主義の根を抜きとる闘争なのであり、プロレタリアート独裁をうち固める闘争、毛沢東思想を守りぬく闘争なのである。この闘争では勝利あるのみ、かならず勝利しなければならず、またかならず勝利することができる。

われわれは、思想の役割を重視しなければならず、プロレタリア思想の役割、社会主義思想の役割、マルクス・レーニン主義思想の役割、毛沢東思想の役割を重視しなければならない。われわれ共産主義者からいえば、思想の役割を重視しないということは、俗流唯物論であり、機械的唯物論である。われわれは、偉大な毛沢東思想と偉大な正義の事業によって、人民の熱情をわきたたせ、人民の視野を未来に広げさせ、人民を確固としてゆらぐことなく前進させなければならない。わが国人民は、数千年来のすべての搾取階級の伝統と習慣の力の影響からぬけだし、帝国主義の影響からぬけださなければならない。こうしたすべての影響から解放されたならば、人民は強大な力を持ち、強大な役割をはたすであろう。われわれは、共産主義的自覚を高め、意識的に共産主義思

想を發展させなければならない。われわれは、徹底した革命派になり、動揺派になつてはならない。われわれは、永遠に毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、すべての妖怪変化を一掃し、プロレタリア文化大革命を最後までやりぬかなければならない。

毛沢東思想は、われわれの
革命事業の望遠鏡であり、
顕微鏡である

『解放軍報』社説

(一九六六年六月七日)

現在のこの偉大な社会主義文化大革命は、あらゆる妖怪変化をなぎ倒す大革命であり、人の思想を改造し、人びとの魂に触れる大革命である。どのような武器であらゆる妖怪変化をなぎ倒すのか？ どのような思想で人の頭脳を武装し、人びとの魂を改造するのか？ 偉大な毛沢東思想こそ、その唯一の、もつとも強力な思想的武器である。

毛沢東思想は、われわれの政治的方向であり、われわれの行動にたいする最高の指示であり、われわれがすべての事物を観察し、分析するための思想的、政治的な望遠鏡であり、顕微鏡である。この史上空前の文化大革命のなかで、われわれは毛沢東思想ですべてを観察し、すべてを分析し、すべてを改造しなければならない、つまり、ひと言でいえば、すべてを統率しなければならないのである。われわれは、毛沢東思想をもって敵陣に突撃し、これをおとし入れて、勝利を奪いとらなければならない。

毛主席はわれわれに、「銃をもった敵が滅ばされてからも、銃をもたない敵は依然として存在するのであって、かれらはかならずわれわれと死物狂いのたたかいをするであろう。われわれはけつしてこれらの敵を軽んじてはならない」と教えている。われわれと反党・反社会主義の黒い糸、悪党一味との闘争は、食うか食われるかの階級的大格闘である。銃をもたない敵は、銃をもった敵より、いつそう陰にかくれ、悪がしこく、いつそう陰險で悪らつである。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想がますます深く人びとの心をとらえ、わが党と毛主席が比類なく高い威信をもち、また、わが国のプロレタリアート独裁が日ごとに強固となつてゐるため、現代修正主義者を含めた、ブルジョアジーの代表者やあらゆる妖怪変化は、党にたいして、また社会主義にたいして攻撃を加えるにあたり、往々にして、赤旗をかかげながら赤旗に反対し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のペールをまといながらマルクス・レーニン主義、毛沢東思想に反対してゐる。これは、修正主義がマルクス・レーニン主義に反対するときに用いる常とう手段である。これは、プロレタリアート独裁の条件のもとにおける階級闘争の新しい特徴の一つである。

文化大革命のなかであばき出された大量の事実によつて、われわれは、反党・反社会主義のものどもがすべて搾取階級の野心家、陰謀家、エセ君子であることを、いつそうはつきりと見てとつた。かれらは、うわべでは従うようにみせかけながら陰ではそむき、いろいろな手練手管をもてあそぶ。裏ではこのやり方、表ではあのやり方。表面では人間、かげでは化物。人まえでは人間のことばで話し、背後では化物のことばで話す。かれらはヒツジの皮をかぶつたオオカミであり、微笑を浮かべた人食いトラである。かれらは、いつもマルクス・レーニン主義、毛沢東思想のことばを看板にして、「しかしながら」のあとに否定的なことをさかんに並べたて、ブルジ

ョアジー、修正主義の禁制品を売りつける。ニセの赤旗をかかげた敵は、白旗をかかげた敵より十倍も凶悪である。ヒツジの皮をかぶつた敵は、ヒツジの皮をかぶつていない敵より十倍も陰險である。微笑を浮かべたトラは、キバをむき出したトラより十倍もどう猛である。糖衣にくるんだ砲弾は、本物の銃や弾丸より十倍も恐ろしい。トリデは、内部からもつとも容易に攻め落とされるものである。われわれの「肝臓」部にもぐりこんだ敵は、おおつびらな敵よりはるかに危険である。この点は、われわれの嚴重な注意と高度の警戒心をひきおこさないわけにはいかない。

このようにきわめて複雑で先鋭な階級闘争のなかで、われわれはどのようにすれば敵味方をはつきりと區別し、階級的立場にしっかりと立つことができるだろうか？ また、どのようにすれば革命と反革命、真の革命とニセの革命、マルクス・レーニン主義と修正主義を見分けることができるだろうか？ それには、かならず毛沢東思想という強力な思想的武器をしっかりと把握し、毛沢東思想をすべての事物を観察する望遠鏡、顕微鏡としなければならない。無敵の毛沢東思想をもち、毛主席の發展させた弁証法的唯物論と史的唯物論という科学的世界観と方法論をもち、また、毛主席の階級と階級闘争についての学説という鋭い武器をもつことによつて、われわれは一切の是非を見分ける最高の基準をもつことになる。そして、毛のさきほどのことをもはつきりと見ぬき、小さなことを見て、大きなことをさとることができ、現象をとおして、本質をはつきりと見きわめ、迷霧を払つて、すべてをどう察し、種々さまざま妖怪変化が身の隠し場所もなくなるようにすることができ、さらにまた、高所に立ち、遠くを見渡し、全局を見てとり、将来を見てとり、今回の社会主義文化大革命の偉大な意義と深い影響を見てとることができ、何ものをも恐れず、勇敢に前進し、社会主義文化大革命の最前列に立つこ

とができる。

毛主席はわれわれに、「プロレタリアートは自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとし、ブルジョアも自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとする」と教えている。二つの世界観の真つ向から対決する闘争は、相手がこちらを圧倒するか、こちらが相手を圧倒するかのどちらかである。日和見は通用せず、中間の道はありえない。打倒されたブルジョアは復活、転覆の陰謀をくわだてるにあたって、つねに、思想を先行させ、つねにイデオロギーをつかみ、上部構造をつかむものである。ブルジョアの代表者は、かれらの地位や職権を利用して、一部の部門の指導権を奪いとり、それを一手に握り、文学、演劇、映画、音楽、美術、新聞、定期刊行物、ラジオ、出版物、学術研究、学校などを通じ、あらゆる手を使ってブルジョア、修正主義の毒素をまきちらしている。これによって、人びとの頭脳を腐食し、「平和的転化」をおしすすめ、資本主義復活のために思想面、世論面から準備をととのえようとしている。もし、われわれのプロレタリア思想が陣地を占領しないならば、ブルジョア思想は思うままにはびこり、徐々に食いこみ、一口ひとくちとわれわれを呑みこんでしまふであろう。プロレタリア思想が、ひとたび後退すれば、上部構造も後退し、経済的土台も後退する。それは、資本主義の復活を意味することになるのである。したがって、われわれはかならず毛沢東思想のみずからの頭脳を武装し、しっかりとプロレタリア世界観をうちたてなければならぬ。また、偉大な毛沢東思想によって戦い、ブルジョアの思想的陣地と文化的陣地を徹底的にうちこわさなければならない。

毛沢東思想は、現代におけるマルクス・レーニン主義の最高峰であり、現代におけるもつとも高度な、もつとも生きたマルクス・レーニン主義であり、中国人民の無敵の強力な武器であり、同時にまた、世界の革命的人民

の無敵の強力な武器である。中国の民主主義革命、社会主義革命、社会主義建設の実践による検証を通じて、またアメリカ帝国主義とその手先に反対し、フルシチョフ修正主義に反対する国際的範囲の闘争による検証を通じて、毛沢東思想はくつがえすことのできない真理であるということが立証されている。毛主席は天才的、創造的、全面的にマルクス・レーニン主義を發展させた。毛主席はマルクス・レーニン主義の基本的原理にもとづいて、中国革命と世界革命の実践の経験を総括し、ソ連の党と国家が現代修正主義グループによって乗とられた苦い教訓を総括し、社会主義社会における階級、階級矛盾、階級闘争についての理論を体系的に提起して、マルクス・レーニン主義のプロレタリアート独裁に関する学説を大いに豊かにし、發展させて、修正主義に反対し、それを防止し、また資本主義の復活を防止する一連のすぐれた政策をうち出した。このことは、わが国がいつまでも革命的気概をたもつことを可能にし、わが国が永遠にその色を変えないことを可能にしているばかりでなく、国際プロレタリアートの革命事業にたいしても、きわめて大きな理論的意義と実践的意義をもっている。毛主席のことは、その一言一句が真理であり、一句が一万句にも匹敵する。中国人民が毛沢東思想を把握すれば、中国は興り、無敵となる。世界各国人民が毛沢東思想という生命力にあふれたマルクス・レーニン主義を把握すれば、解放をかちとることができ、帝国主義、修正主義およびすべての反動派を完全に葬りさることができ、全世界にわたって一步一步、共産主義を実現することができる。

わが国の社会主義文化大革命のもつとも根本的な任務は、あらゆる搾取階級がいく千年にもわたってつくりにしてきた、人民を毒する旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を徹底的にぶちこわし、広はん人民大衆のあいだに、まったくあらたなプロレタリアートの新思想、新文化、新風俗、新習慣をつくり出し、形づくることであ

る。それは、階級闘争のはげしいあらしのなかで、毛沢東思想を實際と結びつけて学び、運用し、毛沢東思想を普及させ、毛沢東思想を広はんな労働兵大衆とたく結びつけることである。毛沢東思想は、ひとたび大衆によって把握されると、強大な物質的力となる。事實が物語っているように、毛沢東思想で武装した人はもつとも勇敢で、もつとも聡明で、もつとも心がそろっており、その立場はもつともしつかりしており、その眼光はもつとも鋭い。今回のすさまじい文化大革命のなかで、広はんな労働兵大衆は主力軍の役割を果たしているが、それは、かれらが毛主席の著作を實際と結びつけて学び、運用することに努め、毛沢東思想で頭脳を武装した結果にほかならない。この事實がいまいちど雄弁に物語っているように、広はんな労働兵大衆は毛沢東思想という政治的な望遠鏡と顕微鏡を手に入れたならば、いかなるトリデをもうちくだし、あらゆる敵をなぎ倒すことができる。妖怪変化がどのような手口をもてあそぼうと、どれほど巧妙に偽装しようとして、「三十六計」であろうと、「七十二変化」であろうと、すべて労働兵大衆のするどい目からのがれることはできない。また、どのようなブルジョアジーのがん強なトリデであろうと、すべて徹底的にぶちこわされる運命からのがれることはできない。

毛沢東思想にたいしてどのような態度をとるか、認めるのか、それとも排斥するのか、擁護するのか、それとも反対するのか、熱愛するのか、それとも敵視するのか——これは真の革命とニセの革命、革命と反革命、マルクス・レーニン主義と修正主義の分水嶺であり、試金石である。革命をおこなおうとするならば、毛沢東思想を擁護し、毛沢東思想にもとづいて事をはこばなければならない。革命に反対であれば、必然的に毛沢東思想をそしり、ねじまげ、排斥し、攻撃し、反対することになる。現代修正主義者を含めた、ブルジョアジーの「権威者」であるだんな方やあらゆる妖怪変化は、あらゆる手をつくして毛沢東思想をそしり、広はんな労働兵大衆が

毛主席の著作を實際と結びつけて学び、運用することを極度に敵視している。かれらは、労働兵大衆が毛主席の著作を實際と結びつけて学び、運用することを「俗流化」だとか、「単純化」だとか、「実用主義」だとか、デタラメをいつている。その原因はほかでもなく、かれらが反動的な搾取階級の本能から出発して、毛沢東思想を恐れ、プロレタリアートの革命の真理を恐れているからであり、とくに毛沢東思想と広はんな労働兵大衆との結合を恐れているからである。広はんな労働兵大衆が毛沢東思想という鋭い武器を把握したならば、あらゆる妖怪変化はこれ以上ごまかしていけなくなり、かれらのすべての陰謀術策は徹底的に暴露され、かれらの醜惡な姿は白日のもとにさらけ出され、かれらの資本主義復活の夢は完全に破滅してしまうであろう。

階級敵は、たたかなければ倒れないものである。打ち倒されても、かれらはまたおきあがろうとする。一本の黒い糸を断ちきつても、新しい黒い糸がまた現われてくるであろう。一部のブルジョアジーの代表者を打ち倒しても、新しいブルジョアジーの代表者が舞台上上がって出演するであろう。われわれはかならず党中央の指示にもとづいて、片時も階級闘争を忘れてはならず、片時もプロレタリアト独裁を忘れてはならず、片時も政治を先行させることを忘れてはならず、片時も毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげることを忘れてはならない。われわれはかならず政治を先行させることをしつかりととらえて放さないようにしなければならない。われわれはかならず毛主席の著作をいつそうよく實際と結びつけて学び、運用し、「運用」ということに思い切つて力を入れなければならない。われわれはかならず毛主席の著作をわれわれのあらゆる活動の最高の指示としなければならない。これは革命の要求するところであり、情勢の要求するところであり、対敵闘争の要求するところである。これはまた、ア

メリカ帝國主義の侵略戦争を粉砕するための準備活動をつばにやりとげるのに必要であり、修正主義に反対し、これを防止するのに必要であり、資本主義の復活を防止するのに必要であり、多く・早く・りつぱに・むだなく社会主義を建設するのに必要であり、わが国の社会主義から共産主義への漸次的移行を保証するのに必要である。毛主席はわれわれの心のなかの真紅の太陽であり、毛沢東思想はわれわれの命の綱である。どのような場合であろうと、どのような「権威者」であろうと、毛沢東思想に反対するものは、われわれは全党をあげてこれを誅し、全国をあげてこれを討たなければならない。

われわれは旧世界の批判者である

『人民日報』社説

(一九六六年六月八日)

わが国のプロレタリア文化大革命が急速に、すさまじい勢いで発展しつつあることは、世界を震かんとさせている。あるものは、「中国では七億の人がみな批評家である」といつている。

このことばを口にしてしているものがだれであろうと、また、かれらがそれをよるこぼうと、よろこぶまいと、このことばはひとつの事実を反映している。わが国の広はんな労働者・農民・兵士大衆、革命的幹部、革命的知識人が毛沢東思想を武器にして、かつてみない大がかりな規模で旧世界、旧事物、旧思想にたいする批判をまきおこしていることがそれである。

われわれは、搾取制度を批判し、搾取階級を批判し、帝国主義を批判し、現代修正主義を批判し、すべての反動派を批判し、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子を批判する。

われわれは、ブルジョアジーの代表者を批判し、ブルジョアジーの「学者、権威者」を批判する。

われわれは、ブルジョアジーの歴史観を批判し、ブルジョアジーのさまざまな學術理論を批判し、ブルジョア

ジューの教育学、新聞学を批判し、ブルジョアジューの文学・芸術思想を批判し、すべての悪質な演劇、悪質な映画、悪質な作品を批判する。

要するに、われわれは旧世界を批判し、帝国主義とすべての搾取階級が勤労人民を毒するためにもちてきた旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を批判し、すべての非プロレタリア思想を批判し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想に敵対するすべての反動思想を批判するのである。

われわれはなぜこれらすべての批判をおこなわなければならないのか。

それは、プロレタリアート独裁をうちかためるのに絶対に必要だからであり、社会主義と共産主義を建設するのに絶対に必要だからであり、歴史の発展法則に合致しているからである。レーニンも考えていたように、ブルジョアジューがうち倒されたのちも、かれらの勢力は長期にわたってプロレタリアートをしのぐものであり、とりわけイデオロギーの分野では、かれらはなお長期にわたって優勢を占め、ひじょうに頑強である。かれらはあらゆる手をつくしてこの点を利用し、資本主義復活のために精神の面と世論の面から準備をととのえるものである。わが国では、解放後十七年らしい、思想・文化の戦線で二つの階級のあいだ、二つの道のあいだの長期にわたるはげしい闘争がおこなわれてきたこと、とりわけ最近の一時期、復活をたくらむブルジョアジューと復活に反対するプロレタリアートとの闘争がきわだつてきたことは、あますところなくこのことを物語っている。

毛主席が早くからのべているように、すべて反動的なものは、たおさないかぎり、たおれはしない。これも掃除とおなじで、ほうきがとどかなければ、ごみはやはりひとりひとりでに逃げはしない。世界の事柄はみなそのとおりである。われわれは、新しい世界を建設しようとするなら、かならず古い世界を破壊しなければならない。われ

われは、社会主義と共産主義の新思想、新文化を建設しようとするなら、かならずブルジョアジューの旧思想、旧文化とその影響を徹底的に批判し、一掃しなければならない。

マルクス・レーニン主義の本質は、批判的、革命的だということである。その基本点は、批判をし、闘争をすすめ、革命をおこなうことである。われわれが実行しているのは、戦闘的な弁証法的唯物論の哲学である。闘争こそ生活である。われわれは、正しい闘争の軌道を前進すれば、いよいよ戦闘力をもつようになり、ますますわれわれの偉大な事業を推進することができるのである。

毛主席はつねに、「うちやぶらなければ立てられず、せきとめなければ流れず、とどめなければ進められない」と力説している。ここでうちやぶるというのは、批判をすることであり、革命をおこなうことである。うちやぶるためには、道理を説かなければならず、道理を説くことは、つまりうち立てることである。まずもって打ちやぶれば、おのずからその過程でうち立てられるのである。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想は、たえずブルジョアジューの思想体系をうちやぶる闘争のなかでうち立てられ、発展してきたものにはかならない。毛主席は、「正しいものは、つねにまちがったものとの闘争のなかで発展するのである。ほんとうのもの、よいもの、美しいものは、つねにニセもの、悪いもの、みにくいものとの比較のなかに存在し、それらのものとのたたかいのなかで発展するのである」とのべている。

では、だれに依拠して批判するのか。もつとも広はん人民大衆に依拠するのであり、労働者・農民・兵士、革命的幹部、革命的知識人に依拠するのである。人民大衆は、革命戦争のさい、武器をもちいて旧世界を批判し、権力を奪いとつた。勝利をかちとつてからも、また批判の武器をもちいて、帝国主義、地主階級、ブルジョ

アジアが残していったすべてのわるいものを批判してきた。七億の人民がみな毛沢東思想というもつともするどい武器を手にして批判をおこなってこそ、はじめて、ブルジョアジーがここかしこの片すみにひそませておいたほこりをもつとも広い範囲にわたって掃きよめることができ、また、いく千年らしい独占的、支配的地位をしめてきた搾取階級のイデオロギーをもつとも深いところから根こそぎにすることができるのである。もつとも広はんな人民大衆がプロレタリアートの世界観を身につけて、ブルジョアジーの世界観を批判し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を身につけて、修正主義思想を批判してこそ、はじめて、わが国は社会主義革命を最後までやりぬくことが保証され、わが国は社会主義からしだいに共産主義に移行することが保証されるのである。

「七億の人がみな批評家である」ということ——これはこのうえもなくすばらしい事柄であり、画期的な事柄である。このこと自体は、七億の人が思想を解放し、完全に立ちあがり、もはや帝国主義と搾取階級の旧文化、旧思想の奴隷いではなくなつたことを物語っている。七億の人がみな批評家になるのは、偶然ではない。これは、プロレタリアート独裁の条件のもとであらわれた新しい事柄である。これは、毛沢東思想の輝かしい光のもとであらわれた新しい事柄である。これは、毛沢東思想が広はんな労働者・農民・兵士とむすびついたのちに必然的に生まれてきた新しい気運である。これはわが国の人民大衆の偉大な目ざめである。

どのような偉大な革命運動の発生と深化にも、かならずイデオロギーの分野の大闘争がそれに先だち、かならず偉大な思想革命がそれをみちびくものである。プロレタリア革命の歴史では、ひとつひとつの大闘争が革命の躍進する序幕となり、信号となつた。わが国では、解放後十七年らしい、思想の分野でおこなわれたたびかさなる大闘争が、そのつど革命の機関車のために前進の道をきりひらいた。現在のこのかつてみない大規模の文化大革命

命も、かならず、わが国の社会主義革命の飛躍的な発展と社会主義建設の新たな大躍進を予告するものである。

人民が立ちあがれば、敵は倒れる。わが国の広はんな労働者・農民・兵士大衆、革命的幹部、革命的知識人がいつせいに立ちあがれば、ブルジョアジーの代表者、ブルジョアジーの「学者、権威者」は倒れるのである。文化大革命のこのかつてみない広はんな批判運動のなかから、いま七億の人民がみな堯舜ヤウシュンのような人物であるという偉大な新時代が地平線にあらわれつつある。

われわれはもろ手をあげて、この偉大な新時代を迎えようではないか。

中国の社会主義文化大革命（第三集）

1966年 初版発行

定価 40 円

出版者 外 文 出 版 社

（北京阜成門外百万荘）

発行者 中 国 国 際 書 店

（北京 P. O. Box 399）

編号: (日)3050-1465

3-J-715P

00022

